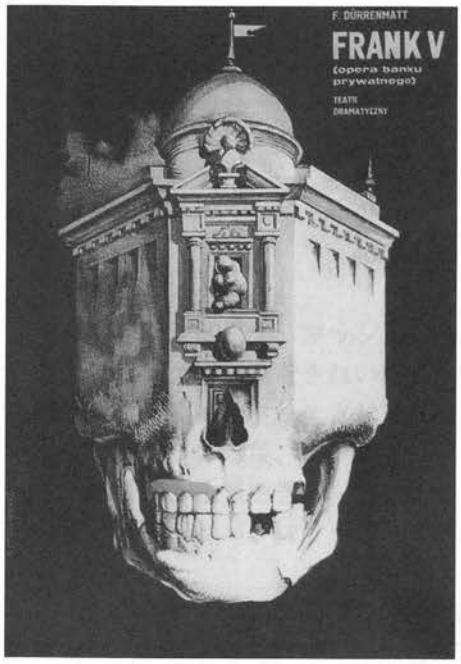
http://hokkaido-poland.com/pole.html

ポーランドの美術・音楽・映画

ポーランド・ポスター１００年展

グラフィック・デザインの奔流



フランチシェク・スタロヴィェイスキ
1962年

8月14日（土）より9月12日（日）まで
北海道立帯広美術館（帯広市緑ヶ丘2緑ヶ丘公園）

ワルシャワ国立ポスター美術館の所蔵品約一五〇点により、今世紀のポーランドのポスターの歴史を通観します。

アンジェイ・ワイダで有名なポーランド映画に「ポーランド派」という呼称があるように、ポーランドのポスターも「ポーランド派」と呼ばれグラフィック・デザイン界のみならず、戦後の世界の現代美術の中で高く評価されてきました。そればかりではなく、ポーランド・ポスターは一九〇〇年頃のポーランド近代美術の誕生と共に発展してきた近代デザイン運動のなかで生み出されたアール・ヌーヴォー、アール・デコ時代の豊かな遺産を持っています。こうした歴史の中で育まれ、戦後の政治体制との特殊な絡みの中で成立してくる鋭い現実批判と知的なウィットやシンボリックな手法が総合され、世界のグラフィック・デザインの中で特別にユニークな表現が確立されていくのです。一般にポーランド美術全体が社会主義リアリズムから離れていくのは一九五〇年代の後半のことといわれていますが、ポスターもやはりこの頃から独自の様式を打ち立て、以降六〇年代にかけて「ポーランド派」と呼ばれるようになるのです。そして、七〇、八〇年代にはシンボリックな手法がより一層強調され、特異で強烈な表現はとどまるところを知りません。ポーランド・ポスターのこうした世界的な成功を支えたものに有名な国際ポスター・ビエンナーレ（一九六六年開始）などがありますが、六八年に開館した世界で初めてのポスター美術館（ワルシャワ国立美術館分館）の活動も忘れる事ができません。今回は、このポスター美術館の所蔵品より今世紀初頭から今日までの作品を厳選し、ポーランド・ポスターの歴史をたどろうとする、本格的な展覧会です。

（有楽町西武ポーランド・ポスター百年展ちらしより転載・23号93年8月）

絵の運命

國田祐作

一九九一年三月ワシントンを訪れたポーランドのワレサ大統領はブッシュ大統領とひとつの協定を結んだ。それは、コロンブスのアメリカ大陸の到達に因む「一四九二年回顧展」のためにポーランドから一枚の絵を貸し出す、というものであった。

一枚の絵というのは、クラクフのチャルトルィスキ美術館所蔵のレオナルド・ダ・ヴィンチ作「白貂を抱く婦人」のことである。この協定は美術館関係者に大きな衝撃を与えた。海外にこの絵が運び出されるのは初めてのことである。万一の事があったら、永久にこの作品は失われてしまう。そんな危惧をよそに、極めて政治的な判断によってこの絵は海を渡り、一九九一年十月から翌年一月までワシントンの国立美術館に飾られ、この展覧会で最大の注目を集めたのだった。この絵が無事クラクフに戻ってきたときの安堵は関係者だ

けでなく多くのポーランド人にとっても同じ思いだったろう。

どんな絵だってかけがえのないものだ。にも拘らず、レオナルドのこの絵は、その転変極まりない運命を見るにつけ特別に扱われるのに不思議はない。なぜならこの「婦人像」は何度も掠奪の危機に直面し、危うく行方不明の運命から救出されるという劇的な転変を辿ってきたからである。

私はこの八月、クラクフのチャルトルィスキ美術館を訪れて旧知のジグルスキ教授に会った。五年前ここでレオナルドの「婦人像」について教示をうけ、彼の研究論文を見せて貰ったのだった。今回はその訳本を届けることと、レオナルドの「婦人像」がどんな苛酷な道のりを歩んでクラクフに落ちついたのかを辿ってみることを目的にしていた。ジグルスキ教授からの紹介状を手にしてまずプワーヴィへ。

ワルシャワから列車で二時間ほどでプワーヴィに着く。レオナルドの「婦人像」がレンブラントやラファエロの作品と並んではじめて陳列されたのがこのプワーヴィの地であった。有力な貴族、アダム・カジミェシ・チャルトルィスキの妻イザベラがここに美術館を創設したのが一八〇九年、代々の館の敷地の一角に〈緑の館〉と呼ばれるゴチック風建築である。彼女の直接の動機は、一七九五年、ロシア、プロシャ、オーストリアによるポーランド分割でポーランドの国民的財宝が掠奪され散逸した運命を眼のあたりにして、独力で芸術作品や歴史的財宝の保護に乗り出したことであった。

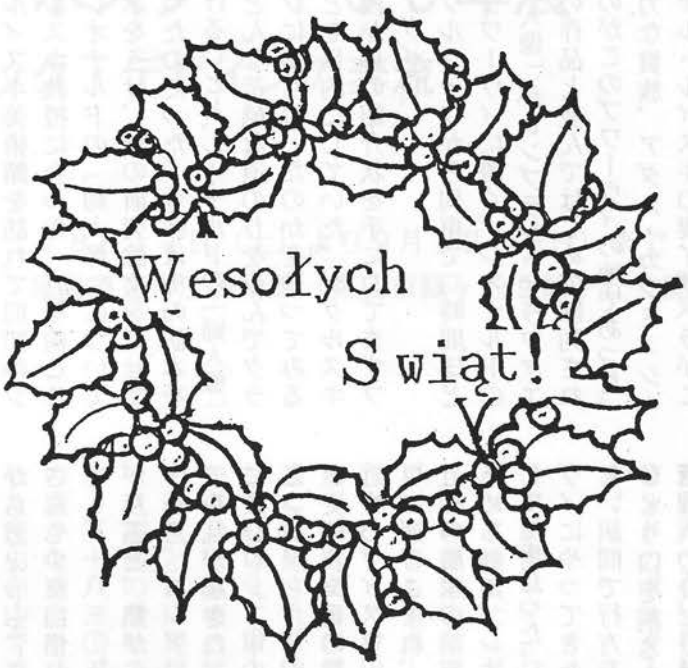
実はプワーヴィのこの館には目ぼしいコレクションはない。クラクフに移管されて以来遺構を残すだけだからガイドをしてくれたヨランタさんも少々口惜しがっている。それでも、一八三〇年の最初の危機に話が及ぶと、熱が入ってくる。この年十一月、ロシアに対してワルシャワで叛乱が起きた。戦火はプワーヴィに及びロシア軍の掠奪が予期されるとコレクションの分散がはじまった。歴史的古文書の数々は夜蔭ひそかに近くのヴィスワ川を下ってワルシャワに運びこまれ、財宝・絵画の方は近くの農家の納屋や教会の壁に封じ込められた。レオナルドの絵もこうして無事だった。モヌケの殻のプワーヴィにやってきたツァーの軍隊は厳しい訊問で行方を探ろうとするが誰ひとり口を割るものはいなかった。管理人のひとりは拷問のために息絶えてしまったという。

レオナルドの絵の次の行先はパリである。イザベラの息子のアダム・イエジィはロシア皇帝から死刑の宣告を受けてパリに亡命し、ノートル・ダム寺院の近く、サン・ルイ島のホテル・ランベールを購入して、ここにコレクションを移した。ここはポーランド亡命者のセンターになり、また忽ちパリ社交界の中心にもなった。シェンキェヴィッチやノルヴィドら作家・詩人も集まり、画家のドラクロワもショパンと連れ立ってやってくる。当時の舞踏会の情景はクフィアトコフスキの絵に描かれているが、そこにはショパンのピアノでポロネーズを踊る紳士淑女たちで溢れている。セーヌ川沿いのこのホテル・ランベールは持ち主も変わって静かなたたずまいではあるが、近くにキューリー夫人の住居があったり、ポーランド図書の専門店があって、ポーランドの雰囲気を感じさせる。本屋のショーウインドウを眺めている若い男女のカップルに声をかけたら、若い娘の方がポーランドから来た留学生であった。当時の目利き、早耳を誇るパリの美術新聞にただの一行もレオナルドの作品を報じていないところから、どうやらこれだけは誰にも見せず秘蔵していたらしい。

再びクラクフへ。レオナルドの「婦

白テンをもつ夫人像

1483ころ　55×40.4cm　板
Cracow, Museum Crartoryski



［ヴェソウィフ　シフィョント！］
クリスマス　おめでとう！

人像」は普仏戦争の戦火を逃れて故国クラクフに戻った。チャルトルィスキ美術館が創立されて全コレクションはここに収まったのである。

一九三九年、最大の危機を迎えた。この年九月、ナチス・ドイツのポーランド侵攻である。コレクションを一時避難させたヴァヴェル城にドイツ軍が乱入、手当たり次第に金貨・財宝を掠奪した。ヴァヴェル城の地下はクリプト（遺体安置室）になっているが、ここに隠したレオナルドの絵には目もくれず、土間に抛り投げて靴で踏みつけていった。画面の左上隅にある破損のあとはその時の傷である。

兵士たちの目からは逃れられても、ヒットラーやゲッペルスのような「美術愛好家」からは逃れられない。この二人はめいめいの個人美術館を計画してレオナルドを奪い合ったのだが、直轄占領地総督のハンス・フランクが漁夫の利を占めて、クラクフ逃亡の際、彼はその絵と共にババリアの別荘に潜んでいたのである。

一九四五年、ドイツ降伏後ポーランドとアメリカの合同調査会はハンス・フランクの別荘から「婦人像」を発見した。ポーランド側のメンバーのひとりにチャルトィスキ美術館のカロル・エストライヒャー教授がいた。ジグルスキ教授の若き日のお師匠さんである。

「彼はそれを見付けた時の興奮をよく私にくり返し語ったものだ。その絵がどんな運命をくぐり抜けてきたかに無知なアメリカ兵士たちがどんな扱いをするか、想像するだけでも耐えられなかったんだろう。この絵だけを自室のベッドの下に隠し一晩中守り続けたそうだ」と亡き師を振り返る。

カンジンの絵そのものに触れないままに紙幅が尽きてしまった。しかし、この絵を語る前にどうしてもその運命を考えないわけにはいかないのだ。そして、この絵のモデルは誰なのか、いつ描かれたのか、悪しき修復以前はどんな絵だったのか、まだハッキリした答は出ていない。何か言いたげなまま、ふと黙ってしまった口元の微かなほほえみを眺めていると、この若い女がほんとうにこのような人生を生きてきたように、深く心に沈んでいくのを感ずるのだ。

（24号93年12月）

ポーランド美術散歩

（1）

國田　祐　作

教会とマリア信仰

昨年の夏、三十度をこえる日中の暑さがようやくおさまる夕方、古都クラクフの中心にある聖マリア教会で聖母昇天を祝う八月十五日の特別ミサが行われていました。信者にまじって堂内に入ると、たくさんのローソクの灯のゆらめきの中で聖母マリアを讃える歌と祈りが続いています。その敬けんな祈りにポーランドの

人々のマリア信仰の深さを強く感じたものです。

ポーランドがキリスト教を受け入れたのは九六六年、最初の国王ミェシコが統治している時代でした。以来ポーランドはカトリック文化圏の一員として西欧キリスト教文明と強い結びつきを持つようになります。しかし一般の農民の古くからの自然信仰、とくに太陽信仰は根強いものがあり、教会は農民のキリスト教化のために彼らの習俗をとり入れなければなりませんでした。農民は父なる神よりも聖母マリアのほうにずっと親しみを感じました。豊かな自然の恵みを与えてくれ、守ってくれる大地の母神への古い信仰をマリア信仰に重ねたのです。したがって教会にはマリアのイコン（聖像）が多く飾られました。

黒い聖母
（チェントホヴァ、ヤスナ・グラ修道院）

マリアのイコンで有名なのはチェンストホヴァの「黒い聖母」です。ヤスナ・グラ修道院にあるこのイコンは一三八四年、イスラエルからここに運ばれたとされ、福音者聖ルカが描いたものという伝説があります。ポ文協のポーランド訪問団のみなさんはよくご存じでしょう。ポーランド民主化の「連帯」運動のシンボルになったことからもマリア信仰がいまなおポーランド人の心を強く結びつけていることがわかります。

クラクフの聖マリア教会は十四世紀に建てられたゴシック様式の建築ですが、正面入口から中央奥の祭壇に向かう方向はちょうど西から東への方向と一致しています。それは東方すなわち太陽の昇る方向に神の座を設けることで農民の太陽信仰をキリスト教に結びつけるためでした。

聖マリア教会
（14世紀、クラクフ）

中央の木彫り祭壇は十五世紀後半にヴィド・ストヴォシという彫刻家の手になるもので、高さ十三メートル、幅十一メートル、中央部が左右に開かれる仕組みになっています。マリアとキリスト、聖人たちの諸像の生き生きとした木彫群が釘一本使わずに組み立てられている見事なものです。第二次大戦中、ナチ占領軍はこれをバラバラにしてニュルンベルグに奪い去り、戦後返還されて現状に修復されました。

聖マリア教会正面の高い塔から一時間ごとにトランペットが鳴り響いて観光客を楽しませますが、十三世紀モンゴル軍のクラクフ侵入の急を告げたラッパがそのはじまりと言われています。

ポーランドの農村の道すじに幼児イエスを抱いたマリア像がよく見られますが、その素朴な姿にわが子を慈しむ母の姿を重ねたのは人々の自然な感情だったのでしょう。

（北海学園大教授・39号98年4月）

（2）

ルネサンス期の建築

十五世紀イタリアからはじまったルネサンスの波はやがてポーランドにも広まっていきます。クラクフのヤギェオ大学はヨーロッパでも最も古い大学のひとつですが、ここを中心に自由で清新な人文主義の学問・文芸が盛んになりました。美術の面でも十五世紀末から十六世紀にかけて大きく変化しました。

国王ジグムント一世はフィレンツェの建築家フランチェスコを招いてヴァヴェル王宮の改築にあたらせました（一五〇七～三五年）。重厚なゴチック様式の王宮はイタリア・ルネサンス様式がとり入れられ、中庭を囲む重々しい壁は取り払われて軽快なアーチの連なる三層のロッジア（回廊）に変わりました（図1）。スタイルはたちまちポーランドの各地にひろがって大貴族の居城や都市の中心にあるタウンホール（公会堂）建築の手本となりました。ヴァヴェル宮のジグムント礼拝堂はイタリア

クラクフ・ヴァヴェル王宮回廊（図１）

のバルトロメオ・ベレッチの傑作といわれ、特徴的な円形ドームや内部装飾、墓室のデザインは礼拝堂の模範とされています。

ジグムント一世は妻の死後、再婚の相手にミラノ公スフォルツァ家のボーナ姫を迎えました。新しい王妃はおおぜいの廷臣を従えてクラクフに入り、ヴァヴェル王宮に最新のイタリア文化を傳えました。宮廷にはイタリア、フランドル、フランスから芸術家が招かれ、絵画、彫刻、工芸に大きな影響を与えました。まあ、雇われ外国人というわけですが、居心地がよかったとみえて何十年も住みついた芸術家もたくさんいます。

クラクフ・カノニチャ通り（図２）

都市の富裕な商人たちも住居をルネサンス風に改装しました。門には半円アーチの開口部をつくり、正面の壁には幾何学模様の装飾、中庭にはアーチを連ねた回廊を設けるなど、大貴族に負けないルネサンス趣味を誇ったのでした。クラクフの旧市内カノニチャ通り（図２）にはいまでもその住居が修復保存されています。修復の途中でルネサンス当時の壁画や天井装飾が見つかり話題を呼びました。ワルシャワの旧市内マーケット広場にもルネサンス様式の商人の住居が昔のまま再建されています。クラクフのマーケット広場のクロスホール（織物会館）はいまはおみやげショップになっていますが、外側の壁の上部にほどこされた曲線の装飾手すりはルネサンス・デザインをそのまま残しています。

ザモシチのタウンホールやサンドミエシの大貴族の居城など、ルネサンスの面影を伝える建築を訪ねてみるのは楽しい旅です。クラクフ郊外のニェポオミツェの森はジグムント・アウグスト王の狩猟地だったところでルネサンス様式の別荘が保存されています。森の中にはいまでは数少ないヨーロッパ・バイソンの飼育場があってバイソン好きの私にはうれしい旅でした。

ポーランド・ルネサンスは文芸・美術の花を咲かせ、自然科学ではコペルニクスのような偉大な学者を生んだように、まさに黄金の世紀でした。

（40号98年9月）

（3）

バロックから新古典へ

何年か前にワルシャワを訪れたとき、国立美術館で「東と西の出会い」というテーマで展覧会が開かれていました。特に目をひいたのは十七世紀の王侯貴族の肖像画が東洋的スタイルであったことです。頭を剃りあげ口ひげを垂らし、どう見てもトルコ武人の姿と変わるところがありません（図3）。これは「サルマチア肖像画」といわれ、当時の貴族の間で流行していたスタイルです。サルマチアというのは古代ローマ史に名を留めるイラン系の勇猛な騎馬民族で、ポーランド貴族はこのサルマチア人の子孫であり、特別な人間であるという、いわば神がかり的な考えが貴族を支配していたのです。このような東洋的趣味の一方で、西ヨーロッパ宮廷のファッションをとり入れた婦人像が並んでいて、まさに東と西の出合いを感じさせるものでした。

（図３）
ヤン・カジミェシ国王

この時期、宗教改革派に対するカトリック勢力が勝利を収めて、豪華に装飾されたカトリック教会がポーランド各地に建てられました。それはバロック教会と呼ばれています。

多くのイタリア人建築家が招かれ、内部装飾や祭壇画に腕をふるいましたが、これらのバロック教会の豪華な様式は貴族の宮殿にもとり入れられました。ワルシャワの王宮もこの時期にバロック様式に改装されています。

十八世紀後半になるとワルシャワを中心として新しい美術の流れが起こります。その先頭を切ったのがスタニスワフ・ポニアトフスキ国王でした。彼はのちにロシア女帝エカテリーナに強制的に退位させられたポーランド最後の国王ですが、若いときから洗練された趣味を持ち、王位につくとすぐフランスやイタリアから多くの建築家や画家を招き、王宮や離宮を新しいスタイルですっかり変えました。バロック建築の過剰な装飾を取りはらい、古代ギリシャ神殿を思わせる典雅なファサード（正面）を採用し、スッキリした直線的な要素でまとめました。これは当時の西ヨーロッパで流行した新古典主義建築にならったものです。ワルシャワのワジェンキ公園にある水上離宮（イタリア人メルリーニ設計）はその代表的な例です（図4）。この公園で日曜日ごとにショパン・コンサートが開かれるのは有名です。

新古典主義はたちまち広まり大貴族の宮殿をはじめワルシャワの富裕な商人たちの邸宅に採用されました。イタリアから招かれ宮廷画家となったカナレットは王宮を中心にこれらの建築が立ち並ぶ新しい都市景観を精密に描いた作品をたくさん残しました。第二次大戦中、ナチス・ドイツによってワルシャワの中心部は徹底的に破壊され、これらの建物のほとんどが消滅しましたが、戦後再びそのままの姿で復興されました。このとき、カナレットの精密な都市風景画が復元事業に大きな役割を果たしたのです。

（図4）水上離宮
（ワルシャワ、ワジェンキ公園）

（41号98年12月）

（4）

尖鋭な美意識

ポーランドの古都クラクフ、その旧市内のマーケット広場に通ずるフロリアンスカ通りの一角にカフェ・ヤン・ミハリクがあります、ここは十九世紀末から続いているカフェで、当時の若い詩人、作家、画家たちが集まり芸術革新の意気もさかんに議論に明け暮れるタマリ場でした。このグループは「若きポーランド」と呼ばれました。カフェ内部は当時流行の幾何学的構成を基調としたユーゲント・シュティルのデザインで装飾されました。カフェの奥には小さなステージがあり、風刺をきかした寄席芸人の歌やダンスが喝采を浴びました。戦禍を免れて今でもそのままの姿で残り観光の名所になっています。壁には若い芸術家たちが酒代のかわりに残した漫画や即興的な絵が残っていて、ここでひとときを過ごしていると戦前の「良き時代」の雰囲気が濃く感じられます。

「若きポーランド」の芸術革新の波は二十世紀のポーランドの幕を開きました。それは全ヨーロッパにおこった新しい芸術運動と同時的なものでした。シチェミンスキは革命後のロシアに渡り、モスクワ美術学校で構成主義のマレヴィッチに学び、故国に戻ってからはキュービズム絵画や文字記号によるポスターで美術界をリードしました。その斬新な表現はいまでも新鮮な感動を与えます。

先年、ワルシャワの若い友人が一冊の画集を見せてくれました。ヴィトキェヴィッチ（通称ヴィトカツィ）の画集です。彼はワルシャワで生まれ、南部タトラ山中のザコパネで育ちました。両親とも芸術家という芸術的環境でヴィトカツィは早くから劇作、絵画、写真に才能を発揮しま

ヴィトカツィ
コンポジション（一九二二）

トマシェフスキ
ショパン記念ポスター

す。本格的な活動に乗り出したのは第一次世界大戦直後、ヨーロッパ全体を覆う崩壊感の中で、まやかしの人間関係を暴力的に破壊するドラマを創造し、絵もまたデフォルメされた人間や怪物がひしめく異様な風景を連作しました。のちに「肖像画商会」を開店し、小説家、俳優などの似顔絵を製造して人気を呼びます。そのデフォルメされた人間の顔がかえってモデル自身気が付かない内面の姿を浮かび上がらせたのです。彼は一九三九年九月、ナチ侵攻に続きロシア軍のポーランド越境のニュースを聞き自ら死をえらび、不条理の舞台の幕を自分の手で閉じたのでした。

ポーランドの美術の中でポスターは格別の位置を占めています。私は一九九三年ワルシャワで開かれた「ポーランドのポスター百年展」を見てきましたが、とくに戦後のポスターは政治的制約をくぐって、苦渋とアイロニー、恐怖と開放感、詩と憂鬱に溢れ、その前衛性は世界を驚かせました。レニツァ、トマシェフスキなどのポスターは日本でもよく知られています。

いま市場の自由化で外国の大量の商品広告やアメリカ映画の大看板が目抜き通りを占有しているのを見ると、反逆の抒情を湛えてきたポーランドのポスターがどこに行くのか不安を覚えます。

（完）

（42号99年5月）

ユゼフ・ヴィルコンの世界

斎田道子

六月十一日から七月二十五日まで、ポーランドの絵本作家「ユゼフ・ヴィルコン展」が小樽の「森ヒロコ・スタシス美術館」で開かれました。

会場には絵本の原画一八一点、日本で出版されている絵本などが展示されていましたが、中でも目をひいたのが、金属や木材で作られた彫刻五十二点でした。ギョロ目をむいた金色のサカナが天井から下がっていたり、子ガモたちを引き連れた母ガモが床の上にいたり――と、ヴィルコンの創作した世界が会場にいっぱいでした。

ヴィルコンは一九三〇年に生まれ、クラクフの美術アカデミーで絵画を学びました。一九五七年からイラストレーター・グラフィックデザイナーとして世界的な活動をしています。百冊以上の子どもや大人の本の制作に携わり、六十冊はポーランド以外の国で出版されています。

自分の作品がどんな会場に展示されていたのか見たい――と、十月に森ヒロコ・スタシス美術館を訪れました。

ヴィルコンは小樽に来る前に、大分・雲仙を訪れました。雲仙では子どもたちを対象にワークショップを開催。ヴィルコンが廃材の山から、インスピレーションに従って材料をえらび出し、その場で犬や鹿・ワシなどを作り上げる。それを見ていた子ども達も同様にして思いおもいに自分の作りたいものを作るという作業でした。

ヴィルコンは、「こんなすばらしいワークショップは今まで経験したことがない。子ども達は自然のものからエネルギーをもらっている。このような子どもたちとの交流を通して自然の姿に学び、エネルギーを得ることができる。子どもたちは展覧会を見に来て大喜びしている。お互いことばは通じないが必要ない。作品は直接語りかけるのだから」といっています。

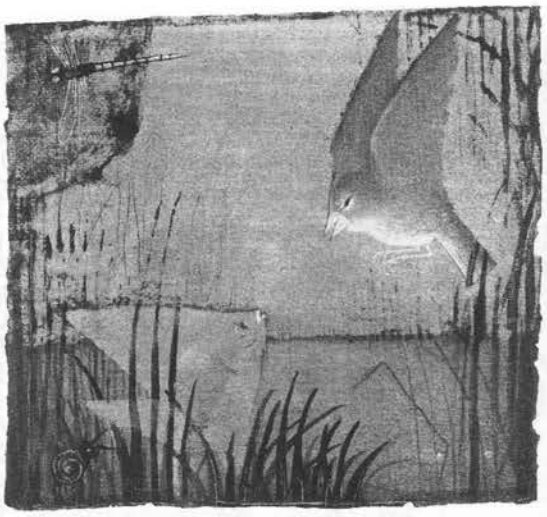
展覧会風景

私が好きな一冊の絵本についておききしました。

「いっしょにいたらたのしいね」という本です。金や赤や青をふんだんに使って、はなやかな日本画のような感じです。事実、日本画の影響を受けているそうです。印刷はイタリアで、新しいテクニックを用いて金の処理をしたとのこと。ヴィルコンにとっても好きな一冊だそうです。

質問に答えてくれるヴィルコンはやさしいおじさまといった感じでした。これからも豊かな想像の世界を創りつづけて、私たちをたのしませてほしいと思いました。

（44号00年1月）



「いっしょにいたらたのしいね」

ショパンとノルヴィト

三浦　洋

ポーランドという星雲がある。ヨーロッパという天幕に浮かぶその星雲状の国は遙か彼方にあって姿をとらえ難いが、宇宙にひときわ大きな光を放つ数々の巨星によって知られる。ポーランドが人類史に与えた人々は、綺羅星の群像となって私たちの胸を射とめ、憧れを抱かせてきた。

「甦えるローザ・ルクセンブルク」なる記事読めば短絡的に涙が溢る
道浦　母都子

淋しさのきはまりて聴く夜のショパン心たぎりし日は還らざる
持田　鋼一郎

人それぞれにポーランドとの出会いの体験をもつ。ある人はコペルニクスによって、ある人はマリア・スクウォドフスカ＝キュリー（キュリー夫人）によって。歌人・道浦母都子にとっては全共闘世代が共有する記憶とともにローザ（ルージャ）・ルクセンブルクという象徴が、またなにごとか失意を胸に秘めた持田鋼一郎にとっては夜ごと聴くショパンの音楽が胸に沁みる体験なのである。

「灰とダイヤモンド」の詩

ポーランド出身の著名人を挙げれば尽きないが、アンジェイ・ワイダの秀作「灰とダイヤモンド」がわが国の文化に与えた影響は想像以上に大きい。ワイダら「ポーランド派」の映画を観るために、日本の映画自主上映・鑑賞運動が起こったことは記憶されてよい。「灰とダイヤモンド」の主人公マチェク（ズビグニェフ・チブルスキ）の姿を見て生き方を決めたと語る人もいるほどだ。個人的なことを言えば、あの映画でマチェクが話す何でもない一言の台詞を聴きとれた感銘が、今もって私をポーランド語の勉強に向かわせている（皆さんも是非、講習会へ御参加下さい）。

「灰とダイヤモンド」という題名は、小説の方の作者アンジェイエフスキが、独立したポーランドの知識人に再評価された一九世紀の詩人ツィプリアン・カミル・ノルヴィトの作品「舞台裏にて」の中の一節から採ったものである。このノルヴィトという不遇の詩人については、最近わが国でも紹介されつつあるが、一つ、とても興味深いことが意外に知られていない。それは、音楽家ショパンと詩人ノルヴィトがパリで親しくしていたことである。

二人がパリで出会ったのは一八四八年末と推定され、ショパンの短い生涯の最晩年の親交であったようだ。ショパンの歌曲にノルヴィトの詩による作品こそないが、ノルヴィトはショパンの芸術を自作「黒い花」「プロメティディオン」などの詩で賛え、「ショパンのピアノ」と題した作品も創作している。ともに亡命ポーランド人の身の上で、祖国に誇りを持つ芸術家としての連帯感も強かっただろうし、一九世紀ヨーロッパ文化の文脈では詩と音楽が

ツィプリアン・カミル・ノルヴィト

ノルヴィトが描いたショパン（右端）

近しかったという背景もあろう。実は、それ以上に、二人には意外な絆があった。かつて、ワルシャワでショパン一家が住んでいた家（クラコフスキェ・プシェドミェシチ通り5番地のクラシンスキ宮殿と呼ばれた所）が、のちに美術アカデミーとなって、そこでノルヴィトは美術を学んだのである（彼は画家でもあった）。

だから二人は、パリで知り合ったとき郷愁にかられながらこんな会話を交わしたかもしれない。

ショパン「ワルシャワで暮らした最後の家はよかった。聖十字架教会も同じ並びでね。あれから一五年以上経ったけど忘れはしない」

ノルヴィト「ああ、あなた（注・ショパンの方が年上）の家は美術学校になりましてね。そこで私は勉強したんです」

一八四九年のショパンの死

当時のショパンはジョルジュ・サンドとの九年間の生活に終止符を打った後で、健康悪化の一途にあった。やがて一八四九年十月十七日、ショパンは亡くなる。臨終に立ち会ったグジマワによれば、その日は水曜日で午前二時にショパンは息をひきとった。その翌十八日、ノルヴィトはショパンの死去を公にする告示文を書いている。これはいわば、同朋ポーランド人芸術家によって起草された公式なショパン追悼文といえよう。その内容の一部は、アーサー・ヘドリーら欧米のショパン研究家が著書に引用したものの邦訳があるが、全文を知りたくなった私は、ポーランドで出版された「ノルヴィト全集」をひもといて訳を試みた。以下がその拙訳である。

追悼・フリデリク・ショパン

ワルシャワの出にしてポーランドの心、そして世界の人々にとっての才能であったフリデリク・ショパンがこの世を去った。胸の病が、三十九歳という少壮の芸術家の死を早め、命を奪ったのである――十月十七日だった。

彼は、至難な芸術の課題を精妙なる技量によって解き得た――野の花々を、それらから一滴の露も、一番軽い綿毛をも散らさず摘み得たのである。そして彼は、言い得ぬ明星、流星となった。ヨーロッパ中に輝く彗星となり、理想の芸術を高揚させた。

野に散ったポーランドの人々の涙は、妙なる調和の結晶となって、人類の宝冠の美しきダイヤモンドに寄り集まった。

これこそ芸術家が為し得る至上のわざであり、それを為したのがフリデリク・ショパンなのである。

彼は生涯のほとんどを（すなわち主たる年月を）祖国の外で、祖国のために生きた。

それは異国の地で達成し得る至上のことであり、それをフリデリク・ショパンは達成した。

（中略）

コハノフスキは「ソブトカ」において初めて世界に民族詩を示したが、音楽において同様のことをショパンが為したのである。

パリ、一八四九年十月十八日

ノルヴィトは、この世の至上の価値――芸術や祖国ポーランドそのものをダイヤモンドで象徴するのを好んだようである。

ローマ法王も若き日に心酔

現在のローマ法王ヨハネ・パウロ二世ことカロル・ヴォイティワ氏も、学生時代に「ポーランドのボードレール」と呼ばれるノルヴィトの象徴詩に心酔し、自身でも詩作して発表したとのことである（M・マリンスキ著『ヨハネ・パウロ二世』）。演劇を愛して戯曲を書き、哲学論文に打ち込んだヴォイティワ。昨年のクリスマスメッセージで自由の大切さを世界に説いたこの法王も、二十世紀精神史に巨大な足跡を残すポーランド人となるにちがいない。

（ポ文協会員・18号92年5月）

交流が音楽を豊かにする

―カジミェシ・コルト氏に聞く―

さる十一月十七日、公演のため来道されたワルシャワ・フィルハーモニー芸術監督のカジミェシ・コルト氏にお話をうかがいました。

コンサート当日の朝という忙しい時間の合い間のインタビューでしたが、コルト氏は丁寧に質問に答えて下さいました。

♪北海道は一九八八年四月の公演に続いて二度目の来訪ですが、印象はいかがですか。

前回は春、今回は雪の季節に訪れましたが、北海道は自然が美しく町並みもきれいです。とても感じがよいのです。

♪前回のプログラムにはショパンのピアノ協奏曲第一番がありましたが、今回は二番を演奏されますね。一番（ホ短調）と二番（ヘ短調）とでは、演奏されるときに留意することが違いますか。

それは大変深い問題です。本を一冊書いても論じ尽くせないほどで、この短い時間に答えるのは難しいです。でも、一般的に言うと、両協奏曲は全く違った性格を持っています。二番の方は自由な演奏ができる余地のある部分が多いのに対し、一番の方は構成・形式がきっちりと仕上げられている作品なのです。そのように対照的ですが、無論、両曲ともすばらしい作品です。

今回演奏する二番については、ピアニストの遠藤郁子さんがすぐれた演奏でその本質を聴かせるでしょう。

♪ルトスワフスキがハンガリーのベラ・バルトークを追悼して作った「葬送音楽」がプログラムにありますが、どんな曲ですか。またルトスワフスキはバルトークを尊敬していたのでしょうか。

このルトスワフスキの曲は、聴き慣れないと少しわかりにくいかもしれませんね。正確に言うには難しいのですが、きっとルトスワフスキはバルトークを敬愛していたことでしょう。その理由として考えられることは、ポーランドにしてもハンガリーにしても、現代の音楽は民族音楽からインプレッションを得て創作されているので、そういう意味でも、ルトスワフスキとバルトークには相通じるところがあったのでしょう。

♪コルトさんはショパンコンクールの本選で指揮をされ、前回は審査員もつとめられましたが、日本の若いピアニスト達にアドバイスをお願いします。

ショパンコンクールはフィルハーモニーホールで開催されるので、様々な形で参与しています。とくに、本選出場者とは必ずピアノ協奏曲を協演します。

実は、日本のピアニストたちには、アドバイスすることがないのです。というのは、日本人はとても賢明で、特に音楽的な才能に恵まれていると思うからです。一般に、日本のピアニストがショパンを演奏するときは、ポーランドのピアニストたちとは弾き方が違います。しかし、私は弾き方が違うことを嬉しく思います。

なぜなら、違う弾き方をすることで、ショパンの音楽はもっと国際的になり、世界に広がって豊かになるからです。どんな民族、どんな文化でもショパンの中に独特の魅力を見

カジミェシ・コルト
(Kazimierz Kord)

一九三〇年、ポーランド南西部のポゴルゼン生まれ。レニングラード音楽院、クラクフ音楽院に学び、クラクフ音楽劇場芸術監督、ポーランド国立放送交響楽団芸術監督を経て、一九七七年六月よりワルシャワ・フィルハーモニー芸術監督。ポーランドにおいては「第一級文化芸術大賞」を授与された。一九七七年に初来日した。

指揮者のカジミェシ・コルト氏（右）と通訳の熊倉ハリーナさん（左）

つけ出して、それを表現するのです。
もちろん、ショパンの曲を演奏するときに古典的に確立された模範（カノン）という宝物があります。それを日本人も長い時間のうちに身につけ、そのように弾きます。しかし、それ以外の部分では、自分の心で何かを感じ、その新しさを付け加えることによって、さらに宝を増すわけです。増した宝に、さらに世界の音楽家たちが独自の何かを加えて行きます。そうやってショパンの音楽は豊かになります。

♪ポーランドに関心を持っている北海道の人々にメッセージを

私は今回で日本に五度訪れていますが、日本のどこへ行ってもポーランドを好んでくれる人々の気持ちがすぐにわかります。それはとても嬉しいことです。そうした皆さんの思いにふれると、皆さんの前で演奏することが大きな喜びになります。感動するのです。
日本人はポーランドのことを好きだといわれますが、今ではポーランド人の多くも日本に関心をもっています。日本の文化だけでなく、日本の全般に対して尊敬しています。だから、日本人とポーランド人は今や互いに関心を持ち合っている間柄なのです。私自身も、日本を何度も訪れることができて、とても嬉しく思っているのです。日本とポーランドとの間に交流があるのは本当に喜ばしいことです。

〈インタビューの後書き〉話題は自然と音楽、ショパンのことに集中してしまいましたが、コルト氏が熱意を込めて語った「カージディ・ナルート・カージダ・クルトゥーラ・ズナーイェ・フ・ショペーニェ・インネ・アスペクティ……（どんな民族、どんな文化でも、ショパンの中に独特の魅力を見つけ出す……）」という言葉は忘れ得ないものです。折しも、四年前の公演でコルト氏と共に訪れたピアニスト、ピオトル・パレチニ氏も十一月十一日に札幌でリサイタルを開きましたが、こちらもすばらしい演奏でした。虚色を排するポーランド正統派のスタイルとはまた違ったパレチニ氏の演奏には、ショパンを骨董品にしておかず、作品の構造に挑み再解釈して生きたショパンを求め続ける探求的な姿勢があります。その真摯な演奏は深い感銘を与え、会場では小さな子供達も、いつまでも拍手を送っていました。
（文責・三浦洋・21号92年12月）

ミツキェヴィチのバラードから ショパンのバラードへ

三浦洋

ポーランドでコンパクト版のミツキェヴィチ作品集を見つけたのを機に、詩人ミツキェヴィチ（一七九八～一八五五）のバラードと音楽家ショパン（一八一〇～四九）のバラードとの関係について調べてみることにしました。芸術史の観点からして「文学ジャンルとしてのバラード（物語、譚詩）から音楽ジャンルとしてのバラードの成立へ」の経緯については興味が尽きません。まして、「器楽にバラードという名をつけたのはショパンが最初であった」（田村進『ポーランド音楽史』）ということを知れば、なおさらです。

周知の通り、ショパンとミツキェヴィチは同時期にパリに暮らしていて親交があり、ミツキェヴィチの二つの詩による歌曲をショパンは作っています（「消えろ！」と「いとしき人」）。また、ショパンの四つのバラードは、ミツキェヴィチの四つの作品からインスピレーションを得て作られたものだ、という半ば伝説めいたエピソードが伝えられています。すなわち、ショパンのバラード一番は、ミツキェヴィチの「コンラート・ヴァーレンロット」に、二番は「シフィテシ湖」に、三番は「シフィテシ湖の水の精」に、四番は「ブドリスの三兄弟」に対応する、という説です（これらのうち「コンラート・ヴァーレンロット」を除く三つの作品は、『バラードとロマンス』という詩集に収められています）。ところが、この説には確固とした根拠がないようです。
筆者が手に取れる限りの資料を使って、この説の起源を辿っていくと、次のような事実がありました。

〈バラード一番と二番について〉
シューマンはかねてショパンのバラード一番を「最高傑作」と激賞していましたが、バラード二番が発表されたときに、「このバラードを書くためにミツキェヴィチのある詩からインスピレーションを受けたとショ

パンは言っていた」と記しています。しかし、ミツキェヴィチのどの作品であるのかについて特定の題名を挙げていません。

〈バラード三番について〉

ドイツの詩人ハイネによれば、ショパンはハイネに対して、バラード三番の着想のもとが「水の精（仏語でオンディーヌ）」にあり、それはハイネの詩「ローレライ」にも通じる、と語ったそうです。その「水の精」がミツキェヴィチの「シフィテシ湖の水の精」とも結びつけて解されるようになったらしいのです。

以上のように、バラード一番と二番はシューマンが、バラード三番はハイネが広めた内容がもとになって、ミツキェヴィチの作品との関連が想像されるようになったらしいのですが、バラード四番についてはそのようなエピソードすらありません。バラード四番が「ブドリスの三兄弟」に対応するというのは、後世の人々の全くの憶測でしょう。結局のところ、大まかな意味では、ミツキェヴィチの作品群からショパンのバラードへのゆるやかな影響関係があったことは推測できるものの、特定のどの作品が該当するのかについては、後の人々の憶測であるというのが真相なのではないでしょうか。

したがって、この俗説を肯定するのも、否定するのも、それぞれに幾らかの根拠があることになるでしょう。概して、肯定派はグルニエやブールニケルらフランスの研究者たちで、この説を好意的に紹介しています。背景には、ミツキェヴィチが一八四〇年から四年間コレージュ・ド・フランスの教授をつとめ、スラブ文学史を講義したことに対する尊敬の念があるのかもしれません（ショパンとサンドはこの講義をよく聴きに行ったそうです）。ピアニストのコルトーも、ショパンを語るとき、ミツキェヴィチに言及しています。

これに対して、イギリスの著名なショパン研究者であるヘドリーは「こじつけのような結末」であるとして真っ向から否定しています。確かに、否定派には「ショパンは標題音楽を志向しなかった」という説得力のある根拠がありますが、一方で、否定してしまうと、ショパンが自分の四つの作品をあえて「バラード」と呼んだ理由が説明できず、この問題は宙に浮くことになります。ともあれ、件のミツキェヴィチの作品が一つも日本語に訳されていないのは寂しい限りです。先頃、ＮＨＫのピアノ教育番組で先生をつとめたモスクワ音楽院教授のゴルノスタエヴァが、「ショパンを教えるとき、学生たちにミツキェヴィチをも理解するように指導している」という旨の発言をしていることを知ったとき、ショックを受けました。ミツキェヴィチの作品はロシア語訳されているので、モスクワ音楽院の学生たちはショパンのバラードを勉強するとき、同時にミツキェヴィチのバラードの世界に接することもできるのですが、日本ではそれがかなわないのです。

さて、短い前置きのつもりが甚だ長くなりました。先に挙げたミツキェヴィチの四つの作品のうち、一番短い「ブドリスの三兄弟」を訳してみました（おそらく本邦初訳であろうと思われます。表現のニュアンスについて教えて頂いた熊倉ハリーナさんにお礼を申し上げます）。「リトアニアのバラード」という副題を持つこの作品がショパンのバラード四番と関係がありそうかどうか、考えてみてはいかがでしょうか。

ショパンとの関連を別としても、往時のリトアニアが近隣のポーランド、ロシア、ドイツ（チュートン騎士団）をどう見ていたかがうかがえて面白い作品だと思います。なお、「氷のごとく」大金を持つというのは、たくさんのお金があるということを表す比喩で、今でも使われている言い方だそうです。

ミツキェヴィチ

ブドリスの三兄弟
―リトアニアのバラード―

老ブドリスが、自身に似てかっぷくよきリトアニア人なる三人の息子を
庭に呼び集めて申すには
「馬を引きたて、鞍しつらえよ
弓矢も剣（つるぎ）も研ぎすませよ！

「ヴィルニュスで我が聞きしは、必ずや布告されるという
世界の三方への三つの遠征
オルギェルトはロシア領を、スキルギェウは隣国ポーランドを
僧キェイストゥートは［ドイツの］チュートンを攻略するという

「いざ発て、たくましき者たち、赴いて国に仕えよ
そなたたちにリトアニアの神々の導きあれ！
今年、我は赴かぬが、しかれども赴く者たちに忠告を与えん
そなたたちには三通り、三つの道あり

「そなたたちの一人は、オルギェルトに従いロシアへ向かうべし
イルメン河を遡りノブゴロドの城下へ
かの地にはテンの尾（しっぽ）や白銀色（しろがね）の織布あり
かの地の商人（あきんど）が持てる大金は氷のごと

「二人目は僧キェイストゥートの隊に従え！
チュートンのならず者どもを根絶やしにせよ！
かの地には砂のごと琥珀あり、奇しき輝きのラシャあり
かの地の僧たちはまばゆき衣まとえり

「三人目はスキルギェウに従い、ニェーメン河を越えて行け！
かの地で目にするは、みすぼらしき家の物の具なれど
すぐれたサーベルや楯を選ぶがよい
そして、かの地より嫁を連れてくるがよい

「そう申すは、世界中どこの異人よりも愛らしいのがポーランド娘だから
小猫のごと陽気で
顔は乳より白く、まぶたには黒きまつげ
輝く両の目は、二つの小さき星のごと

「かの地より我は半世紀前、若かりし頃
ポーランド娘をめとりしが
それも今は墓の中。だが、我は今でも妻を思い出す
こちらの方角を眺めやるたび」

かくなる訓話を我は与え、道中に神の加護を願いき
かくて彼らは馬に乗り、武器を取り、駆け出しぬ
やがて秋が来て、冬になっても、息子たちの姿はなし
ブドリスは思いぬ、みな戦（いくさ）で果てたかと

吹雪の中を村へ駆け急ぐ鎧（よろい）姿の勇士あり
マントの下に、何やら大きなものをかくしながら
「おお、その器にあるはノブゴロドの金品なりや？」
――「いいえ、父君、これなるはポーランド人の嫁にございます！」

吹雪の中を村へ駆け急ぐ鎧姿の勇士あり
マントの下に、何やら大きなものをかくしながら
「さてはドイツより帰りしか。息子よ、
そなたは器いっぱいの琥珀を持ち帰ったのであろう？」
――「いいえ、父君、これなるはポーランド人の嫁にございます！」

吹雪の中を村へ駆ける三番目の勇士あり
マントにあふるるは、かの地でかちえたもの
しかれども、それを彼が見せるより早く、老ブドリスはすでに命じき
三番目の婚礼に客人を呼びあつめよと

（31号95年9月）

一八四〇年のショパンと時代精神

三浦洋

（1）

今年は、ポーランドの詩人アダム・ミツキェヴィチの生誕二百周年で、ポーランドでは大統領の呼びかけで「ミツキェヴィチ・イヤー」が企画されているそうです。その企画には、ノーベル賞を受賞した二人の詩人、チェスワフ・ミウォシュとヴィスワヴァ・シンボルスカが協力します。また、アンジェイ・ワイダは、ミツキェヴィチの代表作『パン・タデウシ』を映画化する計画で、この夏には撮影を開始すると、ポーランドの雑誌「ポリティカ」二月七日号が伝えています。

一方、今年は「日本におけるフランス年」にもあたっていますから、私はフランスでの亡命ポーランド人たちの活動を考えてみたいと思っています。そうすれば来年のショパン没後百五十周年を迎えるための〈予習〉にもなるでしょう。

実は、私は以前から、一八四〇年のショパン（三十歳）にとくに興味を持ってきました。それは、ショパンが書いた、次のような二通の面白い手紙があるからです。

〈一八四〇年五月二日付け、ルドヴィク・プラーテル宛て〉

サンド女史は、彼女の戯曲の初演にあなたを招待するよう、私に言いつけております。ご連絡が遅れてすみません。座席表を見たところ、あなたのお隣はクロー・ベイ様です。

フリッツ・ベイ

〈一八四〇年五月三日付け、コンスタンティ・ガシンスキ宛て〉

君に約束していましたね――これは、刊行されていない『スピリディオン』の原稿です。レイ氏は君の蔵書になることを引き受けました。後で、『ヴァーレンロット』も君に届くでしょう。　お元気で

五月三日だ！　　ショパン

最初の手紙は、ポーランド人のルドヴィク・プラーテル（ショパン研究者の佐藤允彦氏が「ルドヴィカ」と書いているのは誤り）に宛てた、ジョルジュ・サンドの戯曲「コジマ」の初演への招待状で、「クロー」というのは、フランス人の医師アントワーヌ・クローのことです。この手紙の中で、「ベイ」という妙な言葉が二度使われていますが、これはトルコ語で「殿下・閣下」という意味です。なぜショパンはこのとき、トルコ語を使って言葉遊びをしたのでしょうか。

第二の手紙は次の日に書かれたもので、エクスという町にいたポーランド人の友人ガシンスキに三冊の本を送ることを知らせる手紙です。サンドの小説『スピリディオン』と、ポーランドの昔の大文学者ミコワイ・レイの本と、ポーランドの当時の大詩人アダム・ミツキェヴィチの『コンラート・ヴァーレンロット』の三冊です。そして、最後にショパンは、「五月三日だ！」と書いていますが、これは、分割される前のポーランドで一七九一年五月三日に採択された民主的な憲法の記念日を指しています（偶然にも、日本の憲法記念日と同じです）。「五月三日憲法の精神を守ろう」というのは、「ポーランドを復活させよう」という独立回復運動に通じるスローガンだったのです。こんなふうにショパンが政治運動のことを書くのは、大変珍しいことです。

さらに、これらの手紙が書かれた一八四〇年には、もう一つ不思議なことがあります。それは、ショパンとサンドが、この年に限って、ノアンに行かなかったことです。二人は九年間（一八三八～四七年の足かけ十年）一緒に暮らしましたが、一年の半分（だいたい六月から十一月まで）はフランス中央部の田舎、ノアンで過ごすのが習慣でした。そこにサンドが祖母から譲り受けた屋敷があったからです。しかし、一八四〇年だけは例外的に、ずっとパリにいました。これは、なぜだったのでしょうか。

整理すると、私が一八四〇年のショパンに抱いた三つの疑問は、

一、トルコ語「ベイ」を使ったのはなぜか？

二、「五月三日だ！」と書いたのはなぜか？

三、ノアンに行かなかったのはなぜか？　ということです。

私はつい最近になって、これら三つの疑問への答が一つの焦点を結ぶことに気づきました。それは、亡命ポーランド人たちの政治運動と時代精神です。イェジー・スコブロネクというポーランドの歴史学者が書いた「ランベール館のバルカン政策」という論文のおかげで、私の考えが

まとまりました。この論文をポーランドで探して頂いた、北大留学生のマジェーナ・ティムチョさんに、この場を借りてお礼申し上げます。

本稿では、冒頭の二つの手紙を窓にして、当時の政治運動とショパン、サンドの関係をのぞいてみたいと思います。

チャルトリスキとショパン

ショパンを含め亡命ポーランド人のことを考えるには、まず、歴史的経緯を見ておかなければなりません。

先ほど書いた「五月三日憲法」採択から四年後の一七九五年、主権国家としてのポーランドは滅亡しました。ロシア、プロイセン、オーストリアという周辺の三帝国によって分割され尽くしたからです。その後、ショパンが生まれた一八一〇年頃には、ナポレオンによって支配され（ワルシャワ公国）、さらに、ショパンの幼少期には、ウィーン会議が作り出した「会議ポーランド」になりました。これはロシアが支配する国だったので、〈神童〉ショパンは、ロシア皇帝アレクサンドル一世が来たとき御前演奏しました。しかし、次の皇帝ニコライ一世が来たときには歓迎の演奏会に加わりませんでした。一八二五年にロシアで起こったデカブリストの乱に連座して、ポーランド人の革命運動家が虐殺されたことを、思春期のショパンは知っていたからです。

やがて一八三〇年、フランス七月革命の波及で、ポーランドの十一月蜂起（「ワルシャワ革命」とも呼ばれる）が起こりました。そのときのリーダーがアダム・イェジー・チャルトリスキです。蜂起は一時的に成功しましたが、翌年九月、ロシア軍によって鎮圧され、たくさんのポーランド人が亡命することになりました。ショパンは蜂起の少し前にポーランドを出国しており、蜂起の失敗をドイツのシュトゥットガルトで知りました。このときショパンがロシアを憎んで、「神よ、あなたはモスクワ人なのですか！」と書きつけた手記は大変有名です。ちなみに、このときのショパンのパスポートは、ロシア政府が発行したものです。彼がフランス市民権をとったのは、一八三七年になってからです。

ショパンは一八三一年九月からパリで暮らし始めましたが、しばらくして、続々と亡命ポーランド人たちがパリにやってきました。チャルトリスキたちが到着したのは一八三三年でした。一八三四年頃からは、チャルトリスキの妻アンナが、セーヌ川に浮かぶサン・ルイ島のランベール館で、ポーランド難民のためのチャリティー・バザーを開くようになりました。ショパンもこのバザーで必ず買い物をし、募金に協力しました。アンナはポーランドの名家の一つ、サピエハ家の出身ですが、サピエハ家は代々フランスとの結びつきが強かったので、有力者の後ろだてでバザーを開催できたのでしょう。ちなみに、かつてポーランドのサピエハ家では、ショパンの父ミコワイ（フランス名ニコラ）がフランス語を教えたことがあります。実は、ナポレオンの妻の一人となってポーランドを救ったマリア・ヴァレフスカも、ミコワイからフランス語を習いました。

ランベール館の所有者はザッフというセルビア系モラビア人で、その息子フランチシェクは、プラハ大学法学部を卒業後、十一月蜂起に義勇兵として参加した人でした。フランチシェクは、チャルトリスキの片腕となりました。一八四三年になって、チャルトリスキはザッフからランベール館（オテル・ランベール）を正式に獲得し、ここに居を構えました。チャルトリスキを支持する人々が「オテル・ランベール派」と呼ばれるゆえんです。亡命ポーランド人は、政治路線の違ういくつかのグループに分かれていましたが、「オテル・ランベール派」は有力な保守的グループでした。ランベール館の一室に飾られていたと考えられるレオナルド・ダ・ヴィンチの絵については、國田祐作先生の御研究が「ポーレ」第24号（93年発行）に掲載されています。

ショパンは政治活動家ではありませんでしたが、音楽を通じてチャルトリスキと親しく交際しました。とくに、チャルトリスキの姪にあたるマルツェリーナは、ポーランドの名門、ラジヴィウ家の出身で、ショパンにピアノを習いました。ラジヴィウ家総帥のアントニはプロイセンの王女を妻にし、ポズナニ（ドイツ語で「ポーゼン」）地方を治める殿様のような人でした。大変な音楽好きだったので、昔からショパンを可愛がっていました。ショパンの方はアントニにピアノ三重奏曲を献呈しました。ラジヴィウはベートーヴェンやメンデルスゾーンと親しかったので、ショパンはドイツの音楽家のことを聞いて知っていたと思われます。

ランベール館のバルカン政策

さて、ショパンとチャルトリスキの関係を簡単に説明しましたが、よ

うやく手紙のトルコ語の謎に近づくことができます。

チャルトリスキは、ポーランドを再び復活させるために、パリでいくつかの計画を練り、国際情勢に応じて作戦を変えました。もともと、ロシアのアレクサンドル一世の下で外務大臣をつとめ、ウィーン会議に出席した経験を持っていたので、国際情勢に敏感だったのです。彼の基本方針になっていたのは、様々な帝国に支配されているスラブ人が連携して、革命を起こすことでした。とくに、当時トルコに支配されていたバルカン半島に住む南スラブ人（セルビア人やブルガリア人など）の民族運動に共感したチャルトリスキは、陰でセルビア人たちと連絡をとりながら、トルコ政府と交渉しました。これが、「ランベール館のバルカン政策」と言われるものです。もしトルコという国が存続するならば、トルコ内にスラブ人の自治連邦を作る構想を進め、もしトルコが戦争の敗北で崩壊することがあれば、それに乗じて独立革命を起こす、という作戦でした。当時、トルコはエジプト（トルコに支配されていた）と二度の戦争をしましたが、ヨーロッパの国のうち、フランスだけがエジプトに味方し、イギリスなど有力国がトルコを保護しました。かけひきの結果、最終的にイギリスおよびトルコ側が勝った形になりました。フランスは孤立し、東方政策の責任をとって閣僚が交替しました。一八四〇年のことです。

もう、お気づきだと思いますが、冒頭のショパンの手紙が書かれた一八四〇年五月は、トルコの話題で持ち切りの時期だったのです。しかも、手紙の相手のルドヴィク・プラーテルはチャルトリスキの参謀の一人で、トルコ問題について意見を交換する間柄だったのです。その証拠に、この二人が交わした手紙が残っています。また、手紙に出てくるクロー医師は、史料によれば、エジプトに滞在していたことがあり、フランスとエジプトとの結託に関わった人物と想像されます。ですから、この手紙を書くにあたってショパンがトルコとエジプトを意識し、トルコ語の言葉遊びをしたのは、以上のような時代背景があったからだと考えられるのです。

当意即妙に「クロー・ベイ」としゃれを書き、自分のサインを「フリッツ（フリデリクの略）・ベイ」と認めるエスプリは、いかにもショパンらしいと言えます。まるで音楽のように、彼は言葉を転調させています。フランス語からトルコ語への転調は、へ短調から唐突なロ長調へ、あるいは、異名同音による嬰ハ短調から変イ長調への転調だったのでしょうか。一つの手紙に平気で二～五か国語を使うショパンには、言語にも調性感があったにちがいありません。

また、サンドのことも忘れてはいけません。サンドがプラーテルやクローを芝居に招待したことは、彼女自身がチャルトリスキ陣営の人脈に通じていたことを示しています。

私はかつて漠然と、バイロンをはじめ当時のロマン派はギリシャとトルコの対立を意識していたから、ショパンがトルコ語で冗談を言うこともあったのだろう、と思っていました。しかし、実際には、ランベール館のバルカン政策に関わっていたのです。これで、第一のトルコ語の謎は解けました。

（39号98年4月）

（2）

ルーマニアとショパン

さて、チャルトリスキのバルカン政策は、ルーマニアにも関わりました。

「ランベール館のバルカン政策」の著者スコブロネクによれば、当時のバルカン半島の人口は千二百～千四百万人ほどで、最多数を占めるスラブ人が五百五十万人、次に多いのがルーマニア人で三百万人だったということです。ですから、チャルトリスキが計画通り、バルカン半島のスラブ人を自立させるためには、ルーマニア人の協力が欠かせませんでした。また、ルーマニア人の方もハプスブルク帝国やトルコの支配に反対して戦っていましたので、同じような境遇にあるポーランド人に共感し、一八三〇年代から共同運動を模索していました。パリのチャルトリスキとルーマニア人の代表が正式に協力関係を結んだのは、一八三七年です。

こういう経緯からすると、ショパンが一八四一年、最高傑作の「ファンタジー」をルーマニアの王女カトリーヌ・ド・スッゾに献呈したことにも関係がありそうに見えます。背後にチャルトリスキの意向が推測されるからです。実際、スコブロネクは別の著書『バルカン諸民族の同盟者』で、ショパンがカトリーヌにピアノを教え、作品を献呈したことを重視し、「ショパンは、ポーランドとルーマニアの関係の緊密化に貢献した」と評価しています。これは、いかにも歴史家らしい見方です。

しかし、私は必ずしも、スコブロネクの政治的な見方に賛成できませ

ん。というのは、ショパンがカトリーヌに献呈したのには、個人的な理由があったと思われるからです。カトリーヌは、オブレスコフというロシアの公爵の娘で、母親のオブレスコフ夫人は、ショパンの母親ユスティーナと親しくしていました。夫人はフランスとロシアをしばしば往復し、そのついでに、ショパンとユスティーナの互いの伝言の仲介者になりました。それで、ショパンは大きな感謝を込めて、娘の力トリーヌに「ファンタジー」を献呈したのだと思われます。その後もオブレスコフ夫人はショパンに尽くし、晩年の困窮したショパンの家賃の半分を彼女が払いました（残り半分は、スコットランド人の弟子、ジェーン・スターリングが払いました）。

さて、話をルーマニアに戻しましょう。チャルトリスキと結んだルーマニア人の代表は、一八三九年にワラキアに帰国しましたが、逮捕・投獄されたため、結局、計画は頓挫しました。同じ年、先に述べたトルコ・エジプト戦争が起こったので、チャルトリスキの当面の目的は、バルカン半島のスラブ人が弾圧されないよう、民族の自由を守ることに変わりました。そこで、自治の精神を謳う「五月三日憲法」の運動を展開することになりました。「五月三日憲法」はフランス革命の精神を受け継ぎ、「自由・安全・繁栄」をモットーにした憲法だったので、民族弾圧に反対する拠り所となったのです（もっと最近では、「連帯」主導の「五月三日憲法」運動は、社会主義支配に反対する運動でした）。

「五月三日憲法」運動の高まり

一八四〇年から四一年にかけてが、パリにおける「五月三日憲法」運動の最盛期でした。チャルトリスキは、パリの反体制雑誌「両世界評論」に意見広告を載せ、バルカン半島のスラブ人を守るため、フランス政府が政治的に参加する（約百年後にサルトルが流行らせた「アンガージュ」という言葉が使われている）よう訴えました。

同時にチャルトリスキは、スラブ民族の独自性を主張するには、スラブの文学や文化を宣伝する必要があると考え、パリのコレージュ・ド・フランス（市民公開講座の方式で講義を行う大学）の教授に、ポーランドの詩人、アダム・ミツキェヴィチを就任させるべく働きかけました。計画は成功し、ミツキェヴィチは一八四〇年十二月から四年間、「スラブ文学史」の講義を行いました。講義は十二月に始まって、翌年の五、六月に終わるシリーズで、これが四回行われたわけです。

ミツキェヴィチの講義は、「五月三日憲法」運動と同時に進められ、一八四〇年から発行された「五月三日」という機関誌に講義の抄録が掲載されました。

もうおわかりになるでしょう。ガシンスキに宛てたショパンの一八四〇年五月三日の手紙は、このような「五月三日憲法」運動の高まりの中で書かれたのです。これで第二の疑問が解けました。

ガシンスキへの手紙の中で、ミツキェヴィチの作品『コンラート・ヴァーレンロット』のことが書かれているのも、この時期の亡命ポーランド人の雰囲気を反映しています。この作品はパリで有名だったらしく、リストが一八四一年のショパンのコンサート評を書いたときに、引き合いに出しているほどです。また、二十世紀になってからは、この『コンラート・ヴァーレンロット』がショパンのバラード第一番にインスピレーションを与えたという俗説が、ピアニストのコルトーやショパン研究者のブールニケルらによって流されました。この説には根拠がないことは、既に「ポーレ」第31号（95年発行）で書きましたので繰り返しませんが、見方を変えると、コルトーらフランス人が今だにミツキェヴィチを意識しているのは、チャルトリスキの文化宣伝戦略が成功した証拠なのかもしれません。

ミツキェヴィチのバラードがショパンのバラードに影響を与えたという説を、ポーランド人ではなくフランス人が強調するのは、少し滑稽でさえあります。しかし、フランス人が、ショパンだけでなくミツキェヴィチの名前も記憶したのは、嬉しいことです。今もランベール館（ロスチャイルド家の所有で、非公開）の近くには、ミツキェヴィチ記念館（傑作『パン・タデウシ』の自筆原稿がある）とポーランド図書館があります。

そのミツキェヴィチの講義は、「スラブ文学史」と銘打ってはいましたが、実質的には政治演説でした。ポーランドを支配するロシアの野蛮さを告発する内容だったのです。その背景には、ポーランドのカトリックとロシア正教との宗教的対立もありました。それを後に知ったロシアの思想家ゲルツェンは、「ミツキェヴィチの講義は、プーシキン（ロシアの詩人）とミツキェヴィチの間の意見の違いを示した。ポーランド人とロシア人が互いに理解し合う時期はまだきて

いなかったのだ」（「ロシアにおける革命思想の発展について」）と、淋しそうに書いています。

一方、ショパンとサンドは講義の熱心な受講者で、四年とも通いました。二人が十二月から五月の間はノアンに行かず、パリにいたのは、ミツキェヴィチの講義を聴くという目的もあったからでしょう。やがて一八四五年三月になって、ショパンは詩人のステファン・ヴィトフィツキ宛ての手紙で「もう今年は、ミツキェヴィチは講義をしません」と知らせています。

民族的オペラへの期待

実は、ミツキェヴィチがコレージュ・ド・フランス教授に就任する過程では、サンドも役割を果たしました。就任する前年の一八三九年十二月、サンドは、ゲーテとバイロンとミツキェヴィチを並べて論じるエッセーを、「両世界評論」誌に書きました。ドイツのゲーテといえば最高の文学者で、イギリスのバイロンといえばロマン派詩人の崇拝の的でした。彼らとミツキェヴィチを並べて評価するということは、ミツキェヴィチが第一級の詩人であると知らしめることにほかなりません。このようなサンドの行動はチャルトリスキの文化戦略を支援するものにちがいありません。

「バイロン以外は本だと思わなかった」と公言するミツキェヴィチですから、サンドの評価を嬉しく思ったことでしょう。後々まで、ミツキェヴィチがサンドの肩を持ったのは、こんな経緯があるからです。ミツキェヴィチが、「ショパンはサンドの足手まといになる」と言って二人の結婚に反対したのは、ショパンを嫌っていたからではなく、文学者・政治活動家のサンドを尊敬していたからです。ロシアのドストエフスキーやトルストイがサンドを激賞したのも、きっと同じような感覚からでしょう。

その頃、サンドは、ミツキェヴィチの作品「父祖の祭り」のフランス語訳も進めていました。この作品にはミツキェヴィチの演劇観が最もよく現れていると言われ、おそらく、サンドのフランス語訳には、オペラ化の期待が込められていたと思われます。もちろん、オペラを作るよう期待されていたのはショパンです。それまでにも、ショパンには、「ポーランドの民族的オペラを作ってほしい」という声が寄せられていました。とくに、ショパンの師であるユゼフ・エルスナーは、熱心で、「いつか、君の民族的オペラが見たいものだ」とポーランドからの手紙に再三書いていました。チャルトリスキの文化戦略からしても、ミツキェヴィチの作品によるショパンのオペラができることは、願ってもないことだったでしょう。パリの上流階級の人々にポーランドの存在を訴えるにはオペラはうってつけだからです。

すでに現代の私たちは、民族的オペラをいくつか知っています。例えば、ロシアの詩人プーシキンの『ポリス・ゴドノフ』をムソルグスキーがオペラにしたのは有名です。かつて、ソ連時代の映画監督アンドレイ・タルコフスキーは、亡命したイタリアで「ポリス・ゴドノフ」を演出したことがあります（指揮は、クラウディオ・アバドでした）。では、ポーランドで、プーシキンとムソルグスキーに当たるのは誰かと言えば、もちろんミツキェヴィチとショパンでしょう。ミツキェヴィチの「父祖の祭り」は民族の歴史劇であり、その点で「ポリス・ゴドノフ」とも似ています（ミツキェヴィチは、三年目の講義で「ポリス・ゴドノフ」についても論じました）。実際、「父祖の祭り」の芝居は、二十世紀になってから、カジミェシ・ディメク（この人は、今年のミツキェヴィチ・イヤーの参画者の一人）の演出によって、ポーランドの政治運動に使われたことがあります。一九六八年一～三月の学生運動ですが、ロシアへの反抗の感情を煽る劇だとして、弾圧されました。ですから、ショパンがオペラ化していたならば、十九世紀にも使えた可能性があるわけです。

しかし、ショパンはオペラを作りませんでした。サンドが「父祖の祭り」を訳していた一八三九年は、私の考えでは、ショパンの音楽の後期が始まる年です。一八三九年作のソナタ第二番、一八四〇年作のポロネーズ第五番嬰ヘ短調、一八四一年作のファンタジーと、各年の代表作を書けばわかるように、この頃のショパンの音楽は深刻・深遠・思索的で、最も抽象的な楽想に達していました。それは、聴衆を陶酔させるオペラとは正反対の世界です。オペラが必要とする外見的な効果とは対極の世界に、ショパンの音楽がたどりついていたわけです。

確かにショパンがオペラを作らなかったのは残念ですが、そのかわり、後期のショパンの作品は、現代音楽の作曲家が望みながら達し得なかった世界を実現しています。あの深い沈黙の世界です。後期ショパンの美しい音楽の背後には、深い沈黙が満ちています。ウェベルンが求め、武

満徹が理想とし、ノーノが十二級に分けて表現しようとした深い沈黙は、既にショパンの調性音楽の中で実現されていたというのが私の考えです。ウィーンのシュテファン教会の地下で、マジョルカ島の修道院で、夜のノアンの闇の中で、折にふれショパンが「聴いた」沈黙が、後期の作品にはみちています。私には、オペラよりも、そんな作品がショパン的だと思えます。

（40号98年9月）

（3）

一八四〇年とは何だったか

さて、トルコ語と「五月三日」の疑問は既に解けましたが、なぜ一八四〇年にはノアンに行かなかったか、が残っています。ショパンとサンドにとって、一八四〇年とは何だったのでしょうか。

先に、「五月三日憲法」運動の意見広告が「両世界評論」誌に掲載されたことを書きましたが、実は、サンドは「両世界評論」誌の契約ライターでした。ですから、チャルトリスキが「両世界評論」誌でキャンペーンを展開するにあたって、サンドの仲介があったことは容易に想像できます。また、この年は、ショパンとサンドがそろって参加する行事が続きました。四月には、ショパンの弟子ポーリーヌ・ガルシアが、サンドの仲介でルイ・ヴィアルドーと結婚しました。また、七月には、七月革命十周年記念パレードでベルリオーズ作曲の「葬送交響曲」が演奏されましたが、そのリハーサルにショパンとサンドが招かれました。年末にはミツキェヴィチの講義が始まることになっていたわけですから、この年は、ノアンに行かず、パリでずっと過ごすというのが、二人の選択だったのでしょう。

従来、一八四〇年にノアンに行かなかったのは、サンドの戯曲「コジマ」の上演が不評で赤字を出し（サンドの親友、マリー・ドルヴァルが主演したが七回で打ち切られた）、その後始末のためであったと言われてきました。しかし、それ以外の理由として、チャルトリスキやミツキェヴィチへの協力があったのでしょう。ショパンが「五月三日だ！」と書いた一八四〇年は、ポーランドの独立運動の一つの転機でした。そこには、サンドの大きな協力があったのです。後に、画家クフィヤトコフスキが描いたランベール館のパーティの絵に、チャルトリスキ一族とショパン、ミツキェヴィチだけでなく、サンドも描かれているのは至極もっともなことでしょう。

ジョルジュ・サンドが描いたショパンの肖像画（1841年頃）。ショパンは、この絵が大変気に入っていた。

また、一八四〇年前後のフランスは、ギゾー内閣の成立によって七月王政が一段と保守化し、拝金主義の風潮が強まりました。当時のフランス王ルイ・フィリップは「株屋の王」とあだ名されるほど、「バブル経済」の創始者でした。だからこそ、それに反対する社会主義思想が台頭し、サンドは社会主義者ルイ・ブランと行動を共にしたり、あのカール・マルクスと文通したりしました。ブランの著書『労働の組織』（一八三九年刊）に呼応するように、職人の労働組合をテーマとしたサンドの小説『フランス遍歴の職人』が一八四〇年十二月に出版されたことは、実に象徴的です。サンドたちが主役となる二月革命（一八四八年）への密かな準備が始まったのです。

ジョルジュ・サンド（1804～76）

また、ショパンの方は、一八四一年に親友フォンタナがアメリカへ行ってしまってからは、楽譜商に自分で作品を売らなければならなくなりました。そのときショパンはお金

が中心になって動く近代社会の現実に出会って激しくいらだちます。後期の作品の特徴は、そうした彼の苦悶を映し出しているのかもしれません。近代とは、株と同じように芸術がお金で売買される時代です。そういう社会の成りゆきに対して、芸術家としての良心から生まれる悔しさ（ポーランド語の「ジャル」）や淋しさを、ショパンはフォンタナへの手紙で吐露しています。

「今日、ファンタジーが完成した――空は晴れているが、私の心は淋しい」（一八四一年十月二十日）。ですから、かつてシューマンがドイツ語で「我々の時代精神」とショパンを呼び、新しくはジャンケレヴィチがフランス語で「最初の近代人」と表現したショパン像は、一八四〇年代の彼にこそ最もふさわしいと言えます。

一八四一年、四二年にショパンは、生涯の頂点に位置する二つのコンサートを成功させます。ミツキェヴィチはリストたちとともに、一番前の席で耳を傾けました。当時の様々なコンサート評を読むと、「ミツキェヴィチが優れたポーランドの詩人であるように、同郷のショパンはピアノの詩人である」という言い方が見られます。同じ時期に、同じパリでミツキェヴィチが講義をしていたからこそ、こういう賞賛が生まれたわけです。今世紀になって、モスクワ音楽院の教授ゲンリッヒ・ネイガウスは、そのショパン論に「ピアノの詩人」という題をつけましたが、その遠い起源が一八四〇年代にあるわけです。

ドラクロワの貢献

一八四〇年のショパンと時代精神について、既に私の答は書き尽くしましたが、もう一人、是非とも紹介しておきたい人物がいます。それは、ショパンとサンドのかけがえのない友人であった画家のウジェーヌ・ドラクロワです。今年は、「日本におけるフランス年」であるために、ドラクロワ展が九～十一月に開かれました。来年二、三月には、彼の名画「民衆を率いる自由の女神」が来るそうですから、この機会に彼のことを知っておきましょう。

ドラクロワは、ショパンとサンドの関係を交際の最初期から知っていた人で、彼らの肖像画を描いたことで有名ですが、亡命ポーランド人たちに貢献した人でもあります。実は、チャルトリスキがランベール館を獲得する際に仲介したのがドラクロワです。なぜドラクロワが、こんなにもポーランド人を支援し続けたのかはよくわかりませんが、ショパンを誰よりも崇拝していたのは事実です。また、ドラクロワの本当の父が、かつてのフランス外務大臣タレイランであるという考証を信じるならば、関心は一層増します。なぜなら、タレイランは、ナポレオンの片腕としてポーランドを任された人であり、ナポレオン失脚後はロンドンでチャルトリスキにアドバイスをしたこともあるからです（ウィーン会議では互いに敵であったにもかかわらず）。さらにショパンの父がフランス語を教えたマリア・ヴァレフスカをナポレオンに引き会わせたのもタレイランです。タレイラン自身もポーランド人女性（ユゼフ・ポニャトフスキの姉、ティシュキェヴィチ夫人）を愛人にしていましたが、彼は一八三八年になくなりました。

実は、サンドがドラクロワと初めて会ったのは、ショパンと知り合う前でした。一八三四年秋、「両世界評論」誌に執筆者の似顔絵を書く仕事をドラクロワが引き受けたのがきっかけで、サンドと出会ったのです。サンド、ショパン、ドラクロワがそろって顔を合わせたのは、一八三八年春頃（マジョルカ島へ行く前）だったと推測されますが、一八四〇年には三人の親密さが増し、サンドの息子モーリス（かつての夫との間の子供）が二月にドラクロワに弟子入りして絵を習い始めます。ショパン、サンド、ミツキェヴィチ、ドラクロワがパリやノアンで楽しく語らうようになったのは当然の成り行きでしたし、後にショパンの葬儀の準備や墓の記念碑づくりを進めたのもドラクロワでした。ショパンの死後も、永らくドラクロワは亡命ポーランド人たちと交際を続け、ショパンの思い出を語り合ったとしばしば日記に書いています。

さらに驚くことは、ドラクロワがチャルトリスキに斡旋したランベール館は、その昔（一七二九～五一年）サンドの曾祖父クロード・デュパンの持ち物だったのです。当時ランベール館にはヴォルテールらフランスの啓蒙思想家が招かれたそうですが、ヴォルテールの本はショパンの愛読

ドラクロワ

書でしたから、なおさら因縁を感じます。

いや、サンドにはもっと重要な事実があります。サンドはポーランド国王アウグスト二世（ザクセン選帝侯で人種的にはドイツ人）の血を十六分の一引いています。十八世紀前半にフランス元帥になったモーリス・ド・サックスはアウグスト二世の婚外子で、この人がサンドの一方の曾祖父です。サンドは先祖を誇りにしており、息子の名前「モーリス」は、この曾祖父にあやかったと言われます（サンドの父の名もモーリスだった）。

心はポーランド人

サンドとドラクロワが、どんなにポーランドに関わっていたかが、おわかり頂けたと思います。

「生まれにおいてはワルシャワ人、心においてはポーランド人、だが、才能においては世界市民であった」と、かつてポーランドの詩人ツィプリアン・カミル・ノルヴィトはショパンを追悼しました（92年発行「ポーレ」第18号の拙稿を参照されたい）。それをまねすれば、ジョルジュ・サンドは「生まれにおいてはフランス人だが、心においてはポーランド人であった」と言えるでしょう。ショパンがサンドと暮らすようになった本当の理由はサンドが「心においてはポーランド人」だったからだ、と私は考えています。ドラクロワもまた、ショパンたちとのつきあいを経て、「心においてはポーランド人」になりきっていたのかもしれません。

私たちの「北海道ポーランド文化協会」になぞらえて言えば、ショパンを取り巻くサークルは、サンドを会長とする「パリ・ポーランド文化協会」だったわけです。ドラクロワは、その最も熱心な会員だったということになります。またサンドの友人で、後にポーランド系のハンスカ夫人と結婚した作家バルザックも会員に含めてよいでしょう。彼は、ノアンのサンドとショパンを訪れる客でした。バルザックの小説『ゴリオ爺さん』のラストシーンはパリのヴァンドーム広場ですが、まるで約束したかのようにショパンはヴァンドーム広場に引っ越し、そこで亡くなりました。さらには、二十世紀フランスの作家、アンドレ・ジイドも含めてよいかもしれません。ジイドは『にせ金作り』という小説で、ポーランド人のピアニストと駆け落ちするフランス人男性を描いています。ジイドには「ショパンに関する随想」というエッセイもあります。

このように見てくると、ショパン、サンド、ドラクロワは、パリで偶然に出会って親しくなったように見えますが、彼らの先祖たちの時代から、ポーランドと切っても切れない関係をもっていたことがわかります。それぞれの分野で十九世紀ロマン派を代表する音楽家と作家と画家の出会いですが、実は、彼らを結んでいた本当の絆は、ただ一つ、「ポーランド」だったのです。

（完）

（41号98年12月）

ショパンと「名の日」

三浦洋

（上）

ポーランドの人々は、自分の誕生日とは別に、「名の日」を暦の上に持っています。例えば、日本人にもなじみが深い「ヴァレンタインデー」の二月十四日は、もともとキリスト教の世界で聖人ヴァレンタインを記念する日。この日、ヴァレンティという名を持つポーランド人男性は、家族や友人たちとパーティーを開くなどして祝います。もう一つ例をあげましょう。世界史の教科書に出てくる「聖バルテルミーの大虐殺」は昔、フランスで八月二十四日に起こった大事件。この日は聖人バルテルミーの日で、ポーランドならバルトゥオミェイという名の男性がお祝いする日です。もちろん女性にも「名の日」があり、例えば一月一日はブリギッダ、一月二日はマリアの日、といったふうです。一年のすべての日に対応する聖人がいて、ポーランドのカレンダーにはその名が日ごとに記されています。日本語では「聖名祝日」と呼ばれることもあります。

別の言い方をすれば、それだけポーランド人の名前が聖人にちなんで名づけられているということです。誕生日に祝うのは幼少期だけで、大人になるにつれ、「名の日」に祝うようになるのが普通だそうです。この習慣はショパンの時代にもありました。では、ショパンの「名の日」は……。

三月五日にお祝い

ショパンの名はフリデリクで、三月五日を「名の日」として祝ってい

ました。実は、同一の聖人に対し複数の「名の日」があり、フリデリクの日は三月五日の他に十月六日があります。しかし、ショパンは誕生日が三月一日なので、それに近い方を選んだと考えられます。このような「名の日」の選択の仕方は、今でも一般的だそうです。

ここで、ショパンの母親ユスティーナが、パリに行ってしまったフリデリクに宛てて書いた手紙の一節を紹介しましょう。

「もうすぐ、三月一日と五日です。それなのに、あなたのことを抱きしめられません。……神様があなたを見守り、できるだけの祝福を与えてくださいますよう」（一八三七年二月末）

Poniedziałek	Wtorek	Środa
4 Kazimierza, Łucji	5 Adriana, Fryderyka	6 Róży, Wiktora
11 Konstantego, Ludosława	12 Bernarda, Józefiny	13 Krystyny, Bożeny

ポーランドの３月のカレンダー。
「フリデリク」が記されている５日がショパンの「名の日」

このようにショパンの誕生日と名の日がはっきりと記されています。父親のミコワイに比べ、ユスティーナがショパンに宛てた手紙は多くありませんが、毎年二月になると便りを送ったのは、「もうすぐ、三月一日と五日です」という一言を最愛の息子に書かないではいられなかったからでしょう。

姉のルドヴィカも次のように手紙に書いています。

「三月一日と五日のよき日に、私たちがお祈りを捧げたことをお知らせするだけにします……」（一八四二年三月二一日付）

かつて、ショパン研究に取り組んだ日本人には「三月五日」がなかなか理解できませんでした。英国のショパン研究者アーサー・ヘドリーが文字通り英語で「ネーム・デー」と表現したために、ポーランドの習慣を知らない人々が誤解しがちでした。三月一日に生まれたショパンが五日にフリデリクと命名されたのだ、だからその日を祝うのだ、というふうに勘違いしたのです。ショパンの名は、三月五日にちなんでというよりも、ミコワイを雇用したジェラゾヴァ・ヴォーラの領主、フリデリク・スカルベック伯爵にあやかってつけられたものです。教会の洗礼証明書によれば、伯爵夫妻がショパンのゴッドペアレント（名づけ親）ということになっています。

伯爵の子息も同名のフリデリクで、二月二十二日が誕生日。ショパンの洗礼証明書に「二月二十二日午後六時誕生」と記されているのは、ミコワイが誕生日まであやかって申告したからでしょう。かつてポーランドでショパンの誕生日が二月二十二日と信じられていたのは、そのせいです。

ユスティーナはスカルベック家の遠縁にあたりますので、三月五日をフリデリク・スカルベックの名の日としても記憶し続けていたにちがいありません。ちなみに、ショパンの周辺には「フリデリク」という名を持つ人が他に二人います。ルドヴィカの息子（つまりショパンの甥）と、ショパンの親友ティトゥス・ヴォイチェホフスキの息子です。言うまでもなく、ショパンの名にあやかって命名されたのです。この人たちは三月五日か十月六日に祝っていたにちがいありません。

両親にメッセージ

さて、ショパンはポーランドにいた頃、両親の名の日にお祝いのカードを贈りました。今も保存されているのが一八一六年十二月六日、ミコワイに贈ったものと、一八一七年六月十六日、ユスティーナに贈ったものです。後者は次のような文面です。

「ママ、今日の名の日にお祝いします
僕が心の中で思っていることを、天はかなえたまえ
いつもママが健やかで、幸せでありますよう
そして、円満に長生きしましょう」

たった四行ですが、原文のポーランド語では韻が踏まれ、古典詩の形式を持っています。ミコワイに宛てた六行のメッセージでもやはり韻が踏まれています。ショパンが当時、まだ六、七歳の少年だったことを考えると、毎年、文面を変えて詩のような

ショパンが父・ミコワイの「名の日」に贈ったカード

書いたことがありました。

「親愛なるヤン！　君は生きているのか、いないのか。ああ神様、君が僕に便りをくれなくなってからもう三か月にもなる。君から手紙をもらわないでいるうちに、僕の尊い名の日が過ぎてしまった……」（一八二七年三月十四日付）

当時、ヤンは結核を患い、シャファルニャ地方の郷里ソコウォヴォに帰って療養中でした。もはやショパンの名の日にお祝いを書いて送れないほど、病状が悪化していたにちがいありません。この年の暮れか、翌年始めにヤンは亡くなったようです。

師に自筆譜を献呈

ショパンが家族や友人と交わした手紙を見ていると、祝いのメッセージを送る「名の日」が、定期的な音信のきっかけになっていたように思われます。祝うという点だけなら誕生日と変わりませんが、「名の日」はカレンダーに記されているほど公的であり、市民生活の一部になっています。誕生日が生物学的な自分の日であるのに対し、「名の日」は文化的な自分の日であるといえるでしょう。裸で自然世界に生まれた人間が、名前を与えられることによって歴史的世界に錨を下ろし、しっかりとつながれるわけです。

また、「名の日」が人間関係において果たす祝賀の役割を見ると、日本の暦の「大安」に似ていなくもありません。例えばショパンが、一番最初の師ジヴニーに「ポロネーズ変イ長調」の自筆譜を献呈したのは一八二一年四月二十三日。これは、ジヴニーの名ヴォイチェフの名の日です。いわば「よき日」を選んで献呈したわけですが、結果的に師弟の「別れの日」になりました。というのも、ジヴニーはこのポロネーズからショパンの成長を悟り、もはや先生としての役割を終えたと考えたからです。もっとも、ショパン自身が「ポロネーズ第一番」と名づける曲を作ったのは十五年も先のことですが。

もう一つ、ショパンの手紙の中に「聖人の日」として登場するのが、ミハウの日である九月二十九日。まもなくポーランドを発つことになっていたショパンが、寂しい思いを親友のティトゥス・ヴォイチェホフスキに打ち明けた手紙です。

「ぼくはまだワルシャワにいる。ぼくには、出発の日を決める力がない。出発すると永遠に家を忘れてしまうことになるような気がする。死にに行くような気がする……でもきっと、聖ミハウ祭までにはぼくの宝物すべてと別れ、ウィーンにいることだろう」（一八三〇年九月）

しかしショパンが実際に出発したのは十一月でした。この手紙の中に出てくる「宝物」という言葉は、聖十字架教会のショパン柱に掲げられている「宝のあるところに心もある」という新約聖書マタイ福音書の一節と不思議に呼応しています。

さらに、パリでショパンと交流した人物の中で、名の日に関するエピソードを持つのが詩人のボフダン・ザレスキです。ザレスキは二月六日を名の日としていたようで、それにちなみ、一八四四年二月二日にショパンはザレスキの前でピアノを演奏して聴かせました。ザレスキの日記によると、曲目はショパンのプレリュード、マズルカ、ポロネーズなどです。そして最後に、今ではポーランド国歌となった「ポーランドはいまだ滅びず」（作者不詳）を弾いたそうです。

メッセージを書いていたことに驚かされます。ただし一八一八年になると、散文で「パパに対する僕の思いは、音楽で表すほうが易しいのです」と書いています。さらに一八二四年のミコワイの名の日には、ショパンと三人の姉妹とで喜劇を創作し、演じたと伝えられています。早熟な子供たちの様子を伝えるエピソードです。

（51号02年9月）

（下）

ポーランドにいた頃のショパンが、「フリデリク」の名の日である三月五日にお祝いしていたことは、いろいろな資料からうかがえます。例えば十七歳のショパンは、親友のヤン・ビャウォブウォツキにこんな手紙を

それから二年後の三月五日、今度はショパンの名の日にザレスキが祝いのメッセージを送りました。

「レッスンのお邪魔をしようとは思いません。でも、君の名の日ですから、私の一番あたたかい祝福を送らせてください。……願わくば次の機会には、独立した自由なポーランドでこれを告げたいものです。クラクフで事はとてもうまく進んでいます」

ここで書かれている「クラクフの事」とは、一八四六年二月に起こったクラクフ蜂起を指しています。クラクフ周辺の農民らが、オーストリア支配に対して起こした反乱です。分割されたポーランドの独立回復につながりうる動きとして、ヨーロッパの革命家たちが注目した蜂起でした。当時、ザレスキはショパンにとって、祖国の政治運動の様子を語ってくれる数少ない知人の一人でした。ショパンの名の日を祝う形をとりながら、ポーランド情勢を知らせる手紙でもあったわけです。クラクフのことがぼんやりとしか述べられていないのは、検閲を恐れてのことかもしれません。当時のフランス政府は保守化を強め、それが反体制運動を惹起して二年後に二月革命が起こります。

ちなみにザレスキは、ショパンからピアノを習っていたゾフィア・ローゼンガルトと結婚しました。一八四六年十二月二八日の結婚式にショパンは証人となって立ち会い、自作の「主よ、来りませ」という曲を演奏したそうですが、残念ながらその楽譜は残っていません。また、ショパンの歌曲のうち一八四〇年代に作られたものは、ほとんどがザレスキの詩をもとにしています。この事実は、二人の交流の深まりを表しています。

Xマス・イブのアダム

このザレスキと一緒に、一八三二年七月三一日、パリに到着したのがポーランド最大の文学者アダム・ミツキェヴィチ。ワルシャワにいた頃から親交があったザレスキとは違い、ミツキェヴィチはショパンとパリで初めて顔を合わせました。

さて、そのアダム・ミツキェヴィチの名の日は十二月二四日。つまりクリスマスイブですが、この日はミツキェヴィチの誕生日でもあります。誕生日と名の日が同一日なのは、おそらく十二月二四日生誕にちなんで、その日の聖人アダムの名が与えられたからでしょう。ミツキェヴィチの両親の信仰の深さを想像させます。

アダムといえば、かつてショパンコンクールで優勝したアダム・ハラシェヴィチというポーランドのピアニストがいます。彼も十二月二四日にお祝いしているのでしょうか。

（52号03年3月）

ポーランド映画の世界（第二回）

「ポーランド映画の世界」の第二弾として、ポーランドの大作家プルス原作、「砂時計」の巨匠ヴォイチェフ・ハス監督の「人形」の上映会を行います。一九六八年のポーランド映画で、カラー、シネマスコープです。

この映画は、一九八七年にシネマテークジャポネーズによって日本に輸入され、自主上映団体の手で上映されたことがありますが、一般の映画館では上映されたことのない珍しい作品です。

【日時】九月三十日（土）
一回目　午前十時三十分
二回目　午後一時二十分
三回目　午後四時十分
最終回　午後七時

【場所】JABBパート2（札幌市中央区南八西四大京観光ビル地下）

【整理券】前売り五百円、当日七百円。当日清算の前売券を同封いたします。もっとご入用の方は事務局までご一報ください。

【共催】北海道ポーランド文化協会
イメージガレリオ

解説

ボレスワフ・プルス（一八四七～一九一二）は、ポーランドで初のノーベル文学賞を受賞したシェンキェヴィチと並んで、十九世紀の年代から今世紀初頭にかけてのポーランド文学を代表する大作家であります。

プルスは、落ちぶれた小貴族の家に生まれ、大学中退後、様々の職業を経験してから作家生活に入りました。初期の作品は機知に富んだユーモア小説が主体でしたが、やがて社会問題に対する関心を深めて行きます。当時のポーランドは、ロシア・プロシア・オーストリアの三国によって分割支配されて独立を失っており、政治的、経済的、社会的に極めて困難な状況にありました。

プルスは、「芸術は実生活の新しい諸特徴を明らかにするものであるべ

きだ」との立場から、ポーランド社会を冷静かつ客観的に描こうとしました。そうした彼の最大の代表作が長編小説『人形』であります。

この作品は、一八六三～六四年の対ロシア独立蜂起に参加してシベリアに流刑となった主人公ヴォクルスキが、帰国後、精励刻苦して小商人から大企業家に発展して行く過程を縦糸、彼と貴族の娘リザヴェタとの恋愛を横糸として、貴族や商人、労働者や農民といったあらゆる社会層の人々を描き出した壮大なパノラマであり、同時に又、腐敗堕落した社会や、甘やかされた貴族娘、つまり「人形」にしかすぎない恋の相手に絶望した知識人ヴォクルスキの悲劇でもあります。

勤労大衆や下層農民を作品の中に取りこんだ作家はポーランドではプスルが最初でした。その意味でも、長編小説『人形』は、まさに当時のポーランド社会を生き生き描き出したエンサイクロペディアとも言える作品であります。

（灰谷慶三・北大文学部助教授・8号89年8月）

聖週間とユダヤ人問題

本間富雄

「聖週間」とは、キリスト教の復活祭の一週間のことである。

ポーランドの政治には、影絵のように、地と図柄が逆転するときがある。光と闇、正と邪、敵と味方が交錯し、その奥から金環食のような不思議な構図が現れる。

戦後、「灰とダイヤモンド」を見たときの最後の無残な風景は、永くなぞのまま心に残っていた。その意味がやっと解けて来たのは大戦末期のポーランドの歴史を多少学んでからのことだった。映像や音楽は、その時代に禁じられた言葉を、言語以上に表現することができる。

「聖週間」は「灰とダイヤモンド」と同じ、イエジー・アンジェイエフスキの原作である。ワルシャワ・ゲットーのユダヤ人がナチスに対して蜂起した一九四三年四月十九日から五日間のできごとを描いている。

四五年、この小説が出版され、それを読んだアンジェイ・ワイダ監督は、ただちにそれを映画化しようと試みたが検閲当局によって何度も却下された。当時のソビエト政権は国内のユダヤ問題に触れたくなかったのだ。

ヨーロッパでは永い間、反ユダヤ主義の根強い伝統があった。シェークスピアのヴェニスの商人に登場するシャイロックに対する裁判は、現代法から見れば、けっして公正な判決とは言えないが、それを心情的に受け入れる土壌があったから、それが文字になったのである。二十世紀初頭、反ユダヤ感情が特に強かったのは、オーストリア・ハンガリー帝国である。オーストリアで生まれたヒトラーは、民衆の不満や怨念や、敵対意識を巧みに利用し、選挙で第一党となり、ドイツにナチス（国家社会主義ドイツ労働党）政権を誕生させた。ポーランドで生まれ、のちにアメリカに渡り映画監督となったビリー・ワイルダーは、アウシュビッツ収容所で母と祖母を失っているが、現代のヨーロッパでも、表面ではホロコーストに憤慨しナチを非難しながらも、心の中ではユダヤ人が減ったのを喜んでいる人たちがいることを指摘している。

ユダヤ人問題は基本的には人間の心に巣くう差別・偏見の問題であるが、人は誰でも自分の中にある良心に背くもうひとりの自分の存在を認めたくないし、思い出したくない。

旧体制崩壊後、一九九〇年にワイダ監督は初めて、ゲットーの中での人間関係を描いた「コルチャク先生」を発表した。さらに九五年この「聖週間」で、近隣ポーランド人との関係という微妙な問題に迫っている。

ユダヤ人をかくまうことは連帯責任（死刑）を問われるナチス占領下の時代、森の中の一軒家に住む共同住宅の人たちの揺れ動く心情を、ワイダは抑制のきいたタッチで描いている。

四月のゲットーの反乱から五月の壊滅まで、沈黙するしかなかったワルシャワ知識人たちの心の痛みが、この映画の中で語られている。

（43号99年8月）

「鷲の指輪」とゲームの理論

本間富雄

目標達成のために、複雑な要因の中から、条件に最適のカードを選び出す方法を、社会学で「ゲームの理論」と名付けている。

ＧＡＭＥにはそのほか、攻撃の目標、猟の獲物、えじきといった意味もある。当時、ヨーロッパの中央に位置したポーランドは、周辺の軍事大国から見れば、まさにゲームそのものだった。

一九三九年九月一日、午前五時四五分、ドイツ軍機甲部隊によるポーランド進撃が突然開始された。

その八日前にベルリンで、ドイツ・ソ連不可侵条約が結ばれ、ポーランド東西分割の密約が成立していた。そのことを知らなかった日本政府は、十五日にソ連と、ノモンハン休戦協定を結んだが、ソ連は翌々日、ポーランドに進攻した。

密約、奇襲、裏切りは、戦争の定石である。それによって当事者は初則利得（裏切りの利益）を簡単に手に入れることができる。しかし、その利得を保全するためには、その後の相手の反撃、報復力、周囲の国からの制裁等のマイナス要因を考えて、最終利得を計算しなければならない。

当然、ポーランドはその前年、ソ連との間に不可侵条約を結んでいた。ソ連はその年、さらにフィンランドに進攻し、ついに国際連盟から除名されることになるが、二年後のドイツとの開戦で再び、連合軍の支持を取りつけ、日本への侵攻を含めて、大戦の勝利国となることができた。

この映画のテーマは、一九四四年八月一日から十月二日に至るポーランド市民のドイツ軍に対するワルシャワの蜂起から壊滅に至る物語りである。目前まで来ていながら救援にこなかったソ連軍のことも含めて、八九年のベルリンの壁崩壊がなければ作られることのなかった映画である。アンジェイ・ワイダ自身の十代のときの体験をふまえて、西欧世界へ送る痛恨のメッセージでもある。

（44号00年1月）

あなたの愛は何色

本間富雄

人は耐えられない悲しみに出会ったとき、多くは外界との接触を断ち、孤独な暗い部屋に閉じこもり、時の通り過ぎるのを待つか、あるいは別の人格に変容することによって当事者でないかのような自分を演出する。

交通事故で愛する夫を失った妻は、思い出も友情もすべて拒絶し、家を出てパリでひっそりと暮らす。やがて夫に愛人がいたことを知り、夫の友人と共に残された曲を完成し、自分の道を歩き出す。

キェシロフスキ監督は一九四一年、ワルシャワ生まれ、ウージの国立映画大学でワイダ監督の後輩である。九一年には「ふたりのベロニカ」でＬＡ批評家協会賞を受賞している。あまりに鋭い感性と、傷つきやすい魂を持っているためか、作品で政治や歴史を直接に素材にすることはほとんどない。

社会現象よりも普遍的、根源的な罪や、悲しみ。そして裏切られてもなお、心の痛みの中で相手への思いやりを持ち続ける女性のおとなとしての魅力を描いている。

この映画の主な舞台はパリで、語られる言葉はフランス語である。国境を接することなく、したがって侵略されることもなかった国への親しみやあこがれは強い。

夫が生前依頼されたというのは、欧州統一を記念する曲だった。そこに監督のひそやかな政治願望が読みとれる。

この映画は光と影のゆらぎ、それに同調する音楽効果が秀逸である。「言葉が沈黙し、知識が消滅しても……最後に残る最も尊いものは愛」という字幕でこの物語が終わる。

（45号00年6月）

ポーランド料理（4）

Kopytka w sosie mięsnym　じゃがいものニョッキ肉ソース添え

《材料》

〈コペトカ〉　　〈ソース〉（4人分）

じゃがいも	1*kg*	豚肉赤身	200*g*	小麦粉	小さじ1
小麦粉	400*g*	ベーコン	50*g*	クミン	小さじ1/2
玉子	1個	玉ねぎ	1個	月桂樹の葉	1枚
塩	少々	水	700*ml*	塩、こしょう	

《作り方》

〈コペトカ〉

①じゃがいもは皮をむいて、柔らかくなるまで茹でる。
②茹でたじやがいもをつぶす。
③玉子、小麦粉と塩を加えて、混ぜ合わせる。
④その生地で直径3*cm*位の棒を作る。
⑤斜めに1*cm*位の形に切る。
⑥大きめの鍋に熱湯を沸かし、その中にコペトカを入れる。
⑦表面に浮かんできたら、お湯から取り出す。

〈ソース〉

①肉とベーコンは、小さなサイコロに切る。
②ベーコンを鍋でいため、細がくきざんだ玉ねぎを加えてきつね色に焼く。
③②に肉を加え、さらにいため、水を肉がひたひたにつかるくらい入れ、煮立てる。月桂樹の葉、塩を加える。
④火を弱め、およそ30分から1時間煮込む。時々さし水をする。
⑤肉が柔らかくなったら小麦粉を振り入れ、クミンを加え、塩で味付けをして、さらに数分間煮込む。

（日ポ協会関西センターポーランド料理教室レシピより）

ポーランド料理（5）

Ciastka z orzechami włoskimi　くるみ入りクッキー

《材料》

小麦粉	300*g*	ヨーグルト	大さじ3～4
バター	100*g*	細かく砕いたくるみ	50*g*
玉子	2個	バニラエッセンス	少々
粉砂糖	100*g*	レモンの皮のすりおろし	1個分
天板用マーガリン	20*g*	飾り用粒砂糖	50*g*
ベーキングパウダー	小さじ1		

《作り方》

①ふるった小麦粉にバターを切りまぜる。
②①に砂糖、ベーキングパウダーをまぜる。
③粉を円錐形に盛り、中央にくぼみをつけ、そこに全卵1個と卵黄1個分、ヨーグルト、細かく砕いたくるみ、レモンの皮、バニラエッセンスを入れて混ぜ合わせ、こねる。
④生地をめん棒で5*mm*位の厚さにのばし、型でくり抜く。
⑤バターを塗った天板に④を並べ、泡立てた卵白を刷毛で塗り、粒砂糖をかける。上からフォークで穴をあける。
⑥200～220℃に熱したオーブンで、きつね色になるまで焼く（10～15分）。
⑦熱いうちに天板からおろす。